



令和六年度九十九里郷土研究会
会員一覧(令和七年一月三十一日現在・敬称略)

名誉顧問 木島里八

顧問 内山いつ・川島秀臣・齋藤功

会長 大矢吉明

副会長 内山菊敏

事務局長 安達和夫

会計 古川公美甲・伊東邦子

会計監査 河野時巧・浅岡弘美

書記 齋藤映子・谷川良枝

運営委員 内山隆・小澤君代・木村一夫

古河達也・村松英一・鎌田貴俊

会員 秋原芳枝・石橋真人・小川正子

加藤八重子・川島俊江・子安愛子

作田光代・櫻井憲子・鈴木喜美子

鈴木陽子・染谷佳子・高橋世志美

谷川和子・鶴岡静子・当間君子・富田勲

中村あをい・中村幸子・中村亮子・夏目允

藤代智子・古川一美・三宅伯彦・宮野光夫

望月せい子・望月秀夫・望月操・山口勇子

第16号

会長 大矢吉明

事務局長 安達和夫

郷土研通信編集 安達和夫

(連絡先)

090-8000-0695

会員数 47 名
(令和7年1月31日現在)



令和六年度歴史文学研修旅行 『九十九里浜北端に至る郷土の歴史を訪ねて』

令和七年一月二十五日(土)、成田山新勝寺御本尊上陸の地として知られる尾垂浜から旭市に向けて一路北上し、飯岡助五郎の菩提所のある光台寺や九十九里浜北端の刑部岬までの行程を、郷土研究会員の内山隆氏のご案内で巡りました。当日の行程は次の通りです。幸い好天に恵まれ、懸念していたような遅滞や事故もなく、予定通りの時間に無事

帰着しました。

使用した観光バスは、教育委員会並びに文化団体協議会様のご厚意によりお借りすることが出来たことを改めて深くお礼申し上げます。

(安達和夫)



成田山新勝寺御本尊上陸の地尾垂浜にて



この研修旅行に参加された郷土研究会員の染谷佳子様より、次の旅行記をご寄稿頂きます

令和 7 年 4 月 30 日

したので次項に掲載させて頂きます。



光台寺の飯岡助五郎菩提所で花を手向ける

史跡めぐりの旅に参加して

会員 染谷佳子氏

久々に郷土研の史跡めぐりに参加させて頂き楽しい時を過ごさせて頂き感謝です。

九十九里町がまだ海の中にあった頃の海沿いを北上して栗山川を超えると別世界が広がっていることを、今回の旅で感じることが出来ました。銚子へは何度も訪れ、この道も何度も通っていたのですが、内山先生の御資料の神社をめぐり、海沿いに渡来して来た人々の姿が、おぼろげに見えて来ました。房

総半島の海沿いの地は豊かな資源のある所で、未開の地であったのでしょうか？西の方からやって来た人達は、耕しながらこの地に住みついた事が良くわかりました。熊野の方から来た人達が多かったようです。飯岡石の事は、かつて聴いたことがありました。海沿いに沢山あり昔の貧しい家の屋根が飛ばないように乗せていたということを。また平田国学者の篤胤（あつたね）が、「天の石笛（いわふえ）」という「石の笛」は。飯岡石ではないでしょうか？私は勝手に想像の世界を広げました。あと数日で九〇歳を迎える私は普段はあまり歩けないのに今回の旅は楽しく歩きました。男の会員の方は皆、親切で手を貸して下さった事は、心から感謝し御礼を申し上げます。

私は長い間「歴史道楽」で生きて来ました。若い頃は、奈良の古道という古道を歩いた事は自慢でしたが、今も気持ちだけは、珍しい所や新発見には心がときめきます。

今回の旅は、内山先生の入念な御資料や解説で楽しい旅が出来ました事、心からお礼申し上げます。つたない「飯岡助五郎」の話をさせて頂きました事、有りがとうございました。役員の方々のご苦勞、御礼申し上げます。

生涯を歴史道楽恵方道 佳子

韓国濟州島・対馬・房総半島

— 自然環境と文化基盤 — あとがき

運営委員 内山 隆氏

濟州島、長崎県対馬、そして房総半島は温暖な気候を示すヤブツバキに代表される照葉樹の世界であり、特にハマユウ（ハマオモト）の生育地は、黒潮の流路にそって分布しており、房総半島南部がその東端になっています。

三地域の岩礁海岸では、海藻類と魚介類（アワビなど）が豊富であり、農産物を補う食糧資源でした。中でも、稲作に適しない濟州島や対馬では、「雑穀」や「畑作（木庭）」による「単一作物」に依存しない農耕が行われ、海藻は肥料として近代まで利用されてきました。房総半島における稲作（四街道市亀崎）は、北九州地域と比べ約 1000 年遅れた約 2000 年前の開始（注 1）が想定されていますが、縄文時代は狩猟採集による食糧確保が基本でした。

海女の漁労は、狩猟採集そのものであり、自然の恵みに依存しつつ、資源を維持・保有してきた共同体の歴史が指摘されています（注 2）。現在、風力発電など自然資源の活用が重要視されていますが、生物資源に限らず、営利目的に偏ることなく、環境と資源を

保有してきた『海女の観点』が重要であることを結びといたします。

(注1) 『図説日本列島植生史』

(注2) 『済州島海女の民族誌』



いわし博物館残存資料の紹介 1 飯高賢吉氏旧蔵東金八鶴館の写真

いわし博物館の解体により残存資料を九十九里郷土研究会が引き継ぎました。その資料は、かつて『九十九里町誌』を編集している時に町の旧家から採集・寄付されたものです。古文書や版本などはすでに専門家により整理されていますが、その他の近代史関係資料(写真・雑誌・地図などの印刷物)は、未整理に近いです。現在、町内小関地区妙覚寺境内の坊に設立されている「三治郎文庫」に収納されて、徐々に整理されつつあります。

今回は、江戸時代の旧大地曳網主であった粟生(あお)村飯高惣兵衛家(通称エンキョ・隠居)の末裔飯高賢吉氏旧蔵の写真を紹介します。



八鶴館玄関の芸妓連

写真は、東金八鶴湖(はつかつこ)畔の料理旅館八鶴館(はつかくかん)です。玄関と大広間での芸妓による踊りの披露。真正面の床の間には、明治18年(一八八五)創業の文章(漢文)が記された掛け軸が掛かっています。幕末に近い頃漢詩人梁川星巖(やながわせいがん)や遠山雲如(とおやまうんじょ)の詩によつて一躍その名を知られた八鶴湖は、多くの文人墨客(ぶんじんぼつかく)の来遊するところとなりました。明治29年(一八九六)、八鶴館では徳富蘇峰(とくとみそほう)・山路愛山(やまじあいざん)・江原素六(えはらそろく)の講演会が開催され、片貝の青年二十四歳(せうにじゅうよっさい)の中西忠吉(ちゅうきちゅう)も聴講して感銘を受けました。特に徳富蘇峰にひかれ、後に蘇峰主催の国民新聞社や民友社とつながるきっかけとなりました。その縁で昭和11年(一九三六)、蘇峰揮毫(すほうき)の石柱「伊能忠敬先生出生之地」が建てられています。

さて、写真の撮影は年昭和6年(一九三一年)の春。



八鶴館大広間の芸妓連(昭和6年)



この頃の観光案内「花の東金」(中西月華旧蔵)の「旅館」には、「主なる旅館は八鶴館、中蔵、藤村、藤野屋、福寿館等」と八鶴館が挙げられています。由緒あるこの旅館が、残念ながら営業を終了してしまいましたが、当時の豪華な姿を残している貴重な写真です。(齊藤 功)

中西月華の絵葉書世界
 漁、大漁だね

顧問 齊藤 功氏

昨年の晩秋、房総のむらの職員谷鹿栄一・水島美穂、大角沙也香の諸氏が来町し、企画展「房総の漁村（一 仮題）」の一例として九十九里浜の漁村を候補地に現地の視察調査をされた。その際、私と大網白里市文化協会会長の古山豊先生が案内役となりました。片貝の中央公民館から片貝漁港の海の駅内にある「いわし資料館」、作田海岸、作田地区岡集落の旧大地曳網主作田家、片貝須原地区の納屋有楽区の納屋集落などを見学しました。今年に入り谷鹿、大角両氏から九十九里浜の地曳き網漁と「おっぺし」―船が出漁や帰漁の時に主に女性達が行った仕事の写真を尋ねられました。九十九里浜名物の両者を紹介する写真を捜したところ中西月華が戦前に作製した絵葉書にそれを見出し報告しました。掲載の写真です。



大正初期の地曳網 中西月華作製絵葉書



大正初期のオッペシ 中西月華作製絵葉書



昭和44年（一九六九）、九十九里町に念願の片貝漁港が完成しました。日々の辛い労働から開放されると同時に江戸中期以来連綿と続けられてきた地曳網やアグリ網の姿が、九十九里の長い砂浜、長汀から姿を消しました。爾来五十有余年、当時の光景を見ていた少年もすでに古稀を過ぎ、浜で連日繰り広げられていた賑やかな浜の姿を語る人も少なくなつた現在。このような時代状況に中西月華の残した「漁事」の絵葉書は貴重な歴史資料と言えます。以後数回にわたり絵葉書を紹介いたします。ご期待下さい。



九十九里浜の智恵子抄詩碑

長谷川ぬい氏(天網白里市在住)

人っ子ひとり居ない 九十九里の砂浜の
砂にすわって智恵子は遊ぶ。

無数の友だちが智恵子の名をよぶ。

ちい、ちい、ちい、ちい、ちい、ちいー

砂に小さな趾あとをつけて

千鳥が智恵子に寄って来る。

口の中でいつでも何かを言っている

智恵子が両手をあげて呼びかへす。

ちい、ちい、ちいー

両手の貝を千鳥がねだる

智恵子はそれをばらばら投げる。

群れ立つ千鳥が智恵子をよぶ。

ちい、ちい、ちい、ちい、ちい、ちいー

人間商売さらりとやめて

もう、天然の向うへ行ってしまった

智恵子のうしろ姿がぼつんと見える。

一丁も離れた防風林の夕日の中で

松の花粉をあびながら

私はいつまでも立ち尽す

「千鳥と遊ぶ智恵子」

高村光太郎の妻智恵子さんが、九十九里浜の中央、豊海町(現、九十九里町)真亀の地に静養に訪れたのは、昭和9年5月から、12月までの半年余りだったそうです。

夢と芸術のはざままで心を病み、実の妹のせつさんがいるこの地、黒松の林の続く海辺の町、白砂青松の中で静養したそうです。

光太郎は、毎週東京から汽車で千恵子を見舞い、九十九里の大自然と、防風林の中の自由なふるまう智恵子を見て、詩集「智恵子抄」に二つの詩を残します。前記の『千鳥と遊ぶ智恵子』と『風に乗る智恵子』です。

当時、福島の実家豪商長沼家(酒、米など)は他人の手に渡り、母親のせんさんも真亀におられたが、智恵子の病いは癒えず、東京の病院へ移ります。折紙や切り絵にその芸術性が芽ばえ、53才で亡くなる瞬間、正気となって命を終えます。昭和13年10月5日のことでした。

月日は流れ、二つの戦争を経験し日本は負けた。九十九里の地に米軍基地ができたのは、昭和23年のことでした。智恵子のいた「田村別荘」はキャンプ地の外でしたが、防風林の松林は消え、海辺の砂浜はテントが設営され、高射砲が何台も置かれた。赤トンボと呼ばれた無人機に向って、土、日以外は発射訓練で海は荒れ、浜は不漁となり、地域の風紀は乱れました。

この頃、アイオン台風という大きな台風が来た。キャンプは大波をかぶり、米兵は大型トラックに分乗して逃げて行きました。

私は、小学校へ入学したばかりで、「アメリカさん逃げていくね」と会話した記憶があります。その後、キャンプはかまばこ兵舎になり、毎日M・Pが見廻るようになり立入禁止は続きました。約十年、昭和32年に突然基地は無くなり、海は静かになりました。でも、海は不漁続きで若者達の生活は乱れた。

長欠児童が増え、ヒロポン中毒の若者が続出した。しかし、昭和29年、青年会のメンバーで作った俳句の会「白涛会」が中心となり、かつてこの地に高村光太郎が来て、詩集「智恵子抄」の中に二つの詩があったことを知り、地区の浄化を計り、詩碑建立の運動となったのです。

詩碑建立の資金集めのため、県内同好者の協力で俳句大会を開いたり、町行政への働きかけもした。また、句集(篠崎青童句集「欽ダコ人生」)を一五〇円で販売もした。まさに篠崎さんは句碑設立の発案者でした。

映画「智恵子抄」の上映は、婦人会や青年団の協力で入場券を売り(大人七十円、中学生二十円)、また行政の協力もあって基地があ

令和7年4月30日

った近くに歌碑は建ちました。

石材は、久我貞三郎氏所有の根府川石で、小川屋石材店で施行した。文字は、光太郎の第跡のものを拡大し、太平洋を見おろす美しい風紋の続く砂丘に建てられました。

ここにいたるまで草野心平さんのご協力は大でした。



智恵子抄の碑（九十九里真亀）

除幕式は昭和三十六年七月15日、光太郎の没後6年のことでした。式では、草野心平さんや光太郎の弟さんの祝辞は、息子さんが代読された。

智恵子の実妹せつさんは、孫のちえちゃん（1歳）をだっこして幕を引き、とても感動的なものでした。さらに白涛会のメンバーの

詩の朗読や当地の獅子舞の披露もありました。当日は地引き綱もやりましたが大量にとれた鰯のタタキは、大好評だったとか…。私は当時19才で宴会には出ませんでした。室生朝子さんや、東京からのお客様もいっぱい、晴れやかな想い出として脳裏に残っています。

多くの報道もあったので、その後、拓本をとりに来る人もいて、白涛会員でバケツとタワシを持って墨を洗ったこともありました。

その後、国民宿舎九十九里センターが建ち、海沿いには有料の波乗り道路ができました。

詩碑は少し移動しました。現在は土地を高くしたのでそこからは海が見えます。でも、ちよつと淋しい感があります。

広い砂丘の風紋の上に、千鳥のちいさい足跡を見つけ、「人間商売さらりとやめて、もう天然の向うへ行ってしまった」の智恵子の碑は、この町に、今も平和の礎として凜と建っています。

九十九里センターは平成7年「サンライズ九十九里」となりました。今は民営となりモダンな弓形の建物が目を引きまします。

当時の若者達が望んだ九十九里町は、現在サーフィンが盛んな町へと変貌を遂げ、またおいしい観光地として、平和な町になりました。

光太郎さんは最愛の妻を亡くし、岩手の山

中で自給自足の生活をしながら時々東京に戻り裸婦像も刻ってはいたがそれらの作品は、限りなく千恵子の面影があったそうです。そして厳しい雪国の暮しの中で、心はいつも智恵子さんと一緒とその形身の綿入れはんこを着ておられたそうです。



光太郎と智恵子（九十九里真亀）

建立当時のことを、今伝えたいと思い、おぼろげ乍らの記憶と、白涛会のメンバーの書いたものを参考にし、ここに書きあげました。



泥面子に魅せられて

会員 夏目 允氏

泥面子は現在のおはじきぐらいの大きさで素焼きでできています。裏の畑で妻が拾い集めた泥面子は、面が非常に面白いです。

ダイヤモンドクラブ（元の老人クラブ）の

令和7年4月30日

方々に聞けば何か情報が得られるのではない
かと思ひ実物を見てもらいました。「私も持っ
ている。おはじきではないの」等、興味をも
つて見て頂きました結果、九十九里郷土研究
会の媒氏に聞いてみたらどうでしょうとい
うことになりました。



早速電話したところ、泥面子に詳しい方を
紹介するから大綱の郷土史研究会に来ると良
いということで、実物を持って出かけました。
人の繋がりというのは人を高めていくのだと
実感しました。その方は茂原市史調査執筆委
員をやられている方で古山豊氏という方です。
講演された時の資料（茂原市美術館・郷土
資料館第三回セミナーの時の講演内容）の中
から泥面子について書かれていることを紹介

します。

大きさは一・五〜三センチぐらいの小品で
す。面の内容は人面・恵比須・おかめ・米
俵・力士・歌舞伎役者・縁起物・文字等々い
ろいろあります。



又、石膏の型も収集されているとのこと
です。発見場所については、市川・船橋・千
葉・市原など東京湾岸地域の畑の中から出土
しているのが共通点です。私の聞き取りでは
我孫子の台地から多く取れているとのこと
です。太平洋側からの発見は少ない。大網白里
市柳橋・九十九里町片貝（下モ谷）聞き取り
では山武市連沼イ・一宮町・岬町の二町につ

いては、市立市川歴史博物館資料集泥面子に
よるものです。同じ資料から遊び方について
原文のままのせると、正徳二年（一七一二）
刊の『和漢三寸図会』に「意銭（ぜにうち）」
という遊びが描かれている。これは俗に「穴
一」とも呼ばれ、銭を投げて勝敗を競う賭博
的要素の強い遊びで（中略）大人の行動を見
て子供たちの遊びの中に取り入れていったの
だろうと記しています。

なお、古山豊氏の講演資料にも歴史・遊び
方についても詳しく記載されています。

なお、『遊んで集めて「泥面子」の世界、リ
ーフレット京都（岡田麻衣子）』にも泥面子に
についても記載されています。

今後は、太平洋側の出土した泥面子から調
査出来たらうれしいと思います。

最後になりましたが資料を心よく提供して
頂いた古山豊先生にお礼申し上げますと共に
情報紹介して頂いた方々にお礼申し上げます。

故・本保弘文先生の「ご案内による
『ちば見聞録』鷹狩りの道・御成街道を歩く」
(2014年千葉テレビ)

「御成街道」は、徳川家康が九十九里方面
での鷹狩りのために、船橋から東金の間を造
られた、約37kmのほぼ一直線の街道です。慶

令和 7 年 4 月 3 0 日

長十八年十二月十二日（1614 年 1 月 21 日）に着工し、翌慶長十九年一月七日（1614 年 2 月 15 日）に竣工するまでの、ひと月足らずで造られました。

御成街道の研究で名高い生前の本保弘文氏による解説動画の QR コードをお知らせします。

（前編）



（後編）



また、千葉市公式チャンネル「御成街道と御茶屋御殿跡」の解説もされておられます。



本保弘文氏

スマートフォンなどの QR コードリーダーで読み込んで、表示される URL をタップすると映像が表示されます。冒頭で広告が流れますが、数秒後にはスキップすることができます。

令和七年度の活動予定

四月十九日（土） 総会・記念講演

「真珠湾攻撃を空撮した海軍士官」

八角 俊氏

五月十七日（土） 講演会・会員発表

「白幡八幡神社を訪ねて」鈴木陽子氏

「続・三治郎物語」内山いつ氏

六月二十一日（土） 古文書講座

「伊能忠敬の手紙」川島秀臣氏

七月十九日（土） 講演会・会員発表

「能面のこと」鈴木克久氏（元・教育長）

会員発表 木村一夫氏

九月二十日（土） 講演会

「特別展の思い出あれこれ」

鈴木幸子氏（元大網白里市教育委員会職員）

十月十八日（土） 文学歴史散歩

※行程等は別途ご案内します

十一月月上旬 町民文化祭参加

一月十七日（土） 新年会

二月二十一日（土） 講演会

「片貝の生んだ文化人中西月華・三郎父子の生涯」

齊藤 功氏

三月二十一日（土） 役員会

編集後記

昨年十二月に引き続き、郷土研通信第十六号をお届けします。

今回も、会員の皆様方から素晴らしい原稿の数々をお寄せ頂いたことで、充実した内容になりました。

さて、今年度より毎月第三土曜日の会合を毎月行うことに致しました（但し八月と十二月は休会です）。それにより、昨年度は年四回行った講演会は年六回と増やされます。場所はいずれも町の中央公民館です。また、十一月に予定されている町民文化祭にも、例年通り郷土研究会として充実した展示を行いたいと考えております。

今後とも郷土研究会をご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

（安達和夫）

